看護の実践知

- 民衆仏教に学ぶ看護の立居振舞い -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
森山 文則

高度先進医療における看護の実践は、高度な専門知識と技術の習得、欧米の看護理論の導入、エビデンスに基づいたケアの質の向上に邁進している。その一方で、二元的自他関係におけるサービスとしてのケアは、時に提供者も受け手も権利要求の応酬に辟易する場となっている。こうした違和感に対して、主体性を越えたケアのあり方、「場」としてのケアの可能性に光を当てたい。そこには、「待つ」「祈る」「捨てる」といった、自力では「どうにもならないもの」に一切を委ねる他力への信頼感がある。日本の風土の中で民衆が培ってきたこのような他力の信頼感の中にケアの本質があるのではないだろうか。欧米の看護理論を闇雲に導入する前に、宗派仏教にとられない日本の素朴な信仰心の歴史を見つめたい。科学的看護観や看護の専門性を主張する前に、日本という風土の中で長年培ってきた民衆の「信仰心」や「立居振舞い」を見つめる中に、深く患者と向き合う看護の真髄があるのではないだろうか。

まず、「手を合わせる」という行為に込められた祈りと看護について考える。その原点は、路傍に佇む地藏にそっと手を合わせる幼児の無心の祈りにあると思われる。地藏に対する素朴な祈りは、賽の河原地蔵和讃のような子どもを亡くした親たちへのグリーンケアにつながり、「わが子の喪失」と「私の悲嘆」との閉じた関係性を越えて、本来の供養である作善という他者へ開かれた世界を求めていた。そして日本の仏教では、庶民の夥しい不条理な死に対して名もない聖たちの実践が、庶民に救いを与えてきた。一遍上人は、「南無阿弥陀仏」の六字名号に全てを捧げ、「捨ててこそ」と浅はかな智慧やはからいを捨て、生老病死をありのままに受け入れ、救い救われる場が醸成されていた。また、六字名号への深い信仰ゆえに凡夫・慙愧の極みと確信した無学な庶民である妙好人は、「ようこそ、ようこそ」「あさましや、ありがたや」と深い信仰生活を送った。さらに、全国を遊行し、庶民の家々に微笑仏を彫り続けた造仏聖木喰上人は、90歳を越えても無数の微笑仏を彫り、削られ庶民の薬となり、子どもの遊び道具となり、民衆を温かく見守り、救い続けた。

こういった民衆仏教の歴史を紐解いていくと、看護の実践に何が欠けているかがおのずと浮き彫りになる。それは「捨て身の実践たりうるか」である。必要とあらば、看護理論や社会的地位・専門性の向上など喜んで捨てて、患者の苦しみに寄り添い、わが痛みとして共有する、そのような覚悟があるのかが問われている。現代社会は高度先進医療という極限まで人為的に操作可能になった医療の流れに翻弄されている。生老病死という避けられぬ人間の運命に対して、教団や教理、本尊を捨てて民衆に寄り添い続けた聖たちや信仰深い庶民たちは、無心に手を合わせ念仏し、仏に身を委ねた「捨ててこそ」の実践があった。その実践を今こそ看護の実践知として深く学ぶ必要があると切に感じている。